

住まいにおける部屋の構成と家族の生活行為について

Research on Room Composition and a Family's Living Actions within a Home

住居学科
Dept. of Housing and Architecture

定行まり子

Mariko Sadayuki

浅見 美穂

Miho Asami

江川紀美子

Kimiko Egawa

抄 録 本稿では、住居学を専攻する女子大生を対象とし、自分と家族が住んでいる家での自分と家族の生活行為を記述した記録を分析した。その結果、各々の家における部屋の構成と、彼女たちが家族の行動をどのように認識しているかを読み取ることができた。対象とした住まいでは、①1人1室以上の部屋数を持つ家が多く、部屋の呼び方から使う人が特定できる個室が、特に洋室で多い。②部屋名からは使う人を特定できない部屋でも、その部屋での生活行為をみると、実態は誰かの個室になっている部屋も認められた。しかし一方で、③個室内の生活行為にはその部屋の専有者以外の家族の生活行為も多種存在し、決して閉じられた空間ではなく、家族間の相互の関係性を確認することができた。また、リビングなどの家族空間では、飲食や団欒などの生活行為のほかに、趣味や勉強、更衣、生理衛生に関わる個人的生活行為や家事などの生活行為もみられる。住まいの中の人の生活行為は、nLDKの形態内に留まらず、各部屋の機能を超えて多種で広範囲であることがわかった。またその生活行為の種類や場所の量の多寡は、家族の中で人により差があることが明らかになった。

キーワード：生活行為、個室、家族空間、住生活

Abstract Japan Women's University students majoring in "The Housing Subject" recorded the actions of their family members and themselves at home. By analyzing the data, the structures of their houses and how they recognized their family's actions was understood. Among the studied houses, there are many houses with more than one room per family member, and there are many private rooms specified by how they classify the room, especially Western-style rooms. Even when a room couldn't be classified by its name, the room was often used as someone's private room based on the actual actions in the room. While there are various kinds of actions by family members as well as by the main user of the room, the private room was not closed, and it was used by other family members. In family spaces such as a living room, family members do hobbies, study, change clothes, do housekeeping, as well as other private acts including physiological and sanitary acts as well as eating meals. It became clear that a family member's actions in a house exceed the functions of each room greatly beyond functions of the nLDK. It was also found that kinds actions and the number of the places differed depending on each family member.

Keywords : living actions, private room, family space, residential life

1. 研究の背景と目的

少子化や核家族化の進行により、ライフスタイルが多様化した現代にあつては、人々の住まい方や自分自身と家族との関係性も平均という姿を計り知れなくなっている。また、住宅供給側の視点からは、空間の自由度や可変性がある住まいを提案すること

も増えている。従来、人々の生活を、「就寝」「団らん」「食事」「調理」という4つの行為とそれに対応する部屋を表すためにnLDKという表記を用いている。しかし、生活を4つの行為に分解することに無理があり、既成概念にとらわれず、住まい手自身が自らの生き方や暮らし方を選択、意思決定を行い最適な住まいの形を決めていくこともある。これ

らの意識が住まい手にさほど明確でない場合、住まいと暮らしの係にミスマッチが生じる可能性は大きい。

本稿は、将来住まい手側にも住宅供給側にもなり得る住居学科の学生が記述した、「住まいにおける家族の生活行為」を通して、住宅の空間と生活行為の意識化を計り、人と住空間での生活行為との関係性を考察することを目的とする。

2. 研究対象と方法

研究対象は、日本女子大学家政学部住居学科2年(以下、「学生」)「住生活学」での課題提出物に記述された「住まいにおける家族の生活」である。学生の属性は女子85名で、生年の内訳は1989年56名、1990年14名、1988年9名、1986年～1987年と記載無し7名である。1980年以前の生年の学生は対象外とした。

「住生活学」の授業は、住まいの空間における生活行為の意識化を狙いとし、学生自身(以下、「私」)が家族と住んでいる住まいの平面図を画いた後、そこで「私」と家族の生活行為を記述する課題で

ある。学生の提出物の一例を図1に示す。生活行為の調査は、「私」と家族が住まいで行う1週間の生活行為である。その行為の種類と行為を行った者を図中の当該場所に記述した。例：勉強する(私)

また、現在一人暮らしの学生は、家族と共に住んでいた時の記憶に基づいて記述を行った。本稿で「家族」はこの時点で同居をしている家族を指す。

研究の方法は、課題提出物に画かれた図面と「生活行為の記述内容」(以下、「生活行為」)を分類し分析する。

3. 生活行為の分類

生活行為の記述は自由記述としたため、語彙が多種となった。記述された語彙から明らかに類似するものを集約し160種の生活行為を採取した。生活行為は、語彙の類似性に着目し分類を行った(表1)。

表1 生活行為の分類表

生活行為	語意	語彙
寝起き	寝るために床に入ること。 寝床から起き出ること。	寝る、起床
飲食	口から飲むことと食べること。	食事をする、お酒を飲む、間食する、お茶を飲む
炊事	食物の煮炊き・調理をする	食事をつくる、食事の後片付け、冷蔵庫を使う、キッチンの掃除
更衣	衣服を着け身ごしらえをする	着替える、身だしなみを整える、外出の準備、靴をはく・ぬぐ
生理・衛生	身を清潔にし、健康の維持と疾病の予防・治療につとめる	入浴、排泄、耳かき・爪切り・スキンケア、化粧、歯磨き・洗面
休憩・休養	心身を楽にすること、疲れを癒すために体を休める	昼寝、たばこを吸う、庭の花を見る、ごろごろする、くつろぐ・休む
家事	洗濯・掃除など、家庭生活に欠かせないいろいろな仕事	片付け・掃除、ゴミの分別、洗濯物を干す・たたむ、アイロンかけ、郵便物の分類
勉強・仕事	知識や能力を身につけること、頭や体を使って行うこと	勉強する、その他の仕事・雑用・書類整理
余暇趣味	楽しみとして好む事柄。またその好みの傾向。	運動 ストレッチ・筋トレ・ヨガ
		映像・音楽 映画・音楽鑑賞、音楽鑑賞、歌を歌う
		創作 絵を描く、手芸、裁縫、写真を撮る
		読み書き 本を読む、新聞を読む、手紙を書く
その他		ペットの世話、植物の水やり
団楽	親しい者同士の楽しい集まり。	団らん、会話、相談、ゲームをする、遊ぶ
接客	お客さまなどを迎えて相手になる、もてなすこと。	接客・お客さまが泊まる、出迎える、お客さまと談笑
テレビを見る	テレビを見たり聴いたりする。	テレビを見る。
情報・通信	機械的な手段によって、事柄の内容や事件などについての知らせに接すること。	電話する、パソコンを使う、携帯をいじる・携帯でメールを送る、パソコンでインターネットをする、携帯で電話する、コピー機・プリンターを使う
移動	人や物が、その位置や場所を変える	階段の昇降、歩く、自転車を停める、車での送迎

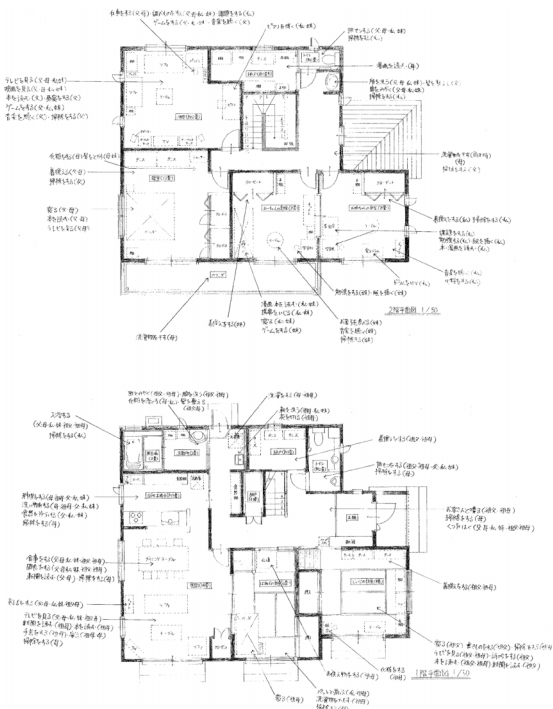


図1 課題提出物の例

なお、分類に際しては、文献1によった。

個人の余暇趣味や更衣・身だしなみ、家事の項目の語彙が他に比して多いのは、日頃の学生の興味と、先行する授業の中で家事行為を学んでいた影響もあると推察される。育児や介護等についての行為の語彙が皆無なのは、学生の属性によるところも多く、家族にも該当する世代がいなかったことによる。

4. 部屋の構成について

4.1. 家族構成と居住地域

学生の同居家族人数は、4人（49%）、5人（20%）、3人（19%）、6人以上（11%）である。祖父母のうち、いずれかが同居（以下、「二世帯同居」）をしている学生は16世帯（19%）である一方、69世帯（81%）は「私」を含む子とその親世代で構成される核家族である（図2）。

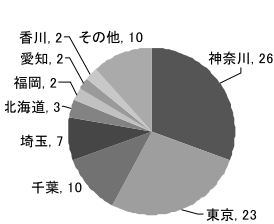


図2 同居家族人数

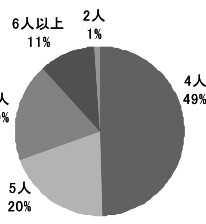


図3 居住地域

居住地域は、神奈川県26世帯（31%）、東京都23世帯（27%）、千葉県10世帯（12%）、埼玉県7世帯（8%）、北海道3世帯、以下福岡、香川、愛知などと続く。全国に広がりがあるものの、78%の世帯は首都圏に存在する（図3）。住まいの平面図から読み取れる居住形態は、一戸建て58世帯（68%）集合住宅27世帯（32%）であった。二世帯同居の16世帯は、全て一戸建て形式であるが、その地域は首都圏に8世帯、他の地域8世帯で、本稿においては明確な地域の特異性は見られなかった。

4.2. 居住人数と室数

各住戸の間取りは、昔ながらの田の字型や通り庭型、間仕切りの少ないワンルーム型など、一戸建て、集合住宅共に様々なプランがあった。いずれの住まいにも家族の共有空間と複数の個室が存在し、その形式や繋がり方は多様であった。必ずしもnLDKと

いう形式に該当しない住まいもある。しかし、そこに暮らす人と住空間を把握するために、各住戸の部屋構成をnLDK+Sという形式で分類をする。

ここでnとは、提出課題に画かれた部屋名から①「誰の部屋」であるのかが特定できる個室、②「寝室」などの部屋名で、そこに記述されている家具等から「誰の部屋」なのか特定できる個室とした。

Sとは、提出課題に画かれた「和室」、「洋室」などと記述された部屋であり、部屋名からは「誰の部屋」であるか用途が特定できなかった部屋とした。

なお、部屋を共有または専有している家族（誰）を本研究では「専有者」という。1名で部屋を専有している場合専有者は1名となる。父母などが部屋を共有している場合、専有者は2名となる。

集計結果を表2に示す。

表2 家族人数と部屋の構成

	同居家族 (F)数 (人)	専有者が 存在する 個室(N)数 (室)	N/F (室/人)	専有者が 不在の部 屋(S)数 (室)	S/F (室/人)	N+S (室)	(N+S)/F (室/人)
単純平均	4.20	2.96	0.72	1.49	0.36	4.46	1.08
中央値	4.00	3.00	0.67	1.00	0.25	4.00	1.00
最大値	7.00	6.00	2.00	5.00	1.25	9.00	2.33
最小値	2.00	1.00	0.20	0.00	0.00	2.00	0.50
標準偏差	0.95	1.12	0.28	1.35	0.33	1.57	0.37

住まいの居住人数と部屋数は、家族4人で3LDK+1が平均像であった。n+Sの室数は単純平均で居住人数の1.1倍、最小で0.5倍、最大では2.3であった。

親世代で部屋を共有している例は、専有者が父母の組み合わせで45室/81組、専有者が祖父母の組み合わせでは6室/8組であった。親世代以上での部屋の専有は、父21室/81人、祖母11室/16人、母7室/85人、祖父3室/8人であり、父の個室の専有が他と比較して多い。

子世代で部屋を共有している例は、10室であった。その内訳は専有者が「私」と妹の組み合わせで7室、「私」と姉で2室、兄と弟の組み合わせで1室である。兄や姉が独立した後、従前に専用していた部屋が図面上に「兄の部屋」等の記述があったが、当人の生活行為の記述もなく、家具のみが画かれていた例や、既に他の家族（弟や母）に使用されていると思われる生活行為の記述もあった。

4.3. 部屋の呼び方（部屋名）

図面に記述された部屋名から、その呼び方を読み取る。家族が共有する空間の記述は、リビング60世帯、居間20世帯、ダイニング35世帯、食堂6世帯であった。その他の記述例として十畳間など部屋の規模を表すもの、ファミリールームなど利用する人を表すもの、茶の間など部屋の用途を表すものがあった。食卓の絵が画かれ、明らかに食事空間と読みとることができる表現でも、部屋名の記述がなかった例も多い。部屋の呼び方の分類と用例を表3に示す。

表3 部屋の呼び方の分類

分類	用例				
人による分類	おばあちゃんの部屋 ○○(名前)の部屋				
用途による分類	寝室	書斎	茶の間	客間	パソコンの部屋
形態による分類	洋室	和室	6畳間	畳の部屋	座敷

家族空間以外の洋室に対する記述は、洋室の総数252室のうち、専有者の表記（「誰」の部屋）が多く174室（77%）であった。用途の表記は、42室（16%）、部屋の形態の表記は、16室（6%）であった。

和室は71/85の世帯に存在し、総数99室である。形態の表記が72%、使う人22%、用途の表記が6%である（図4）。

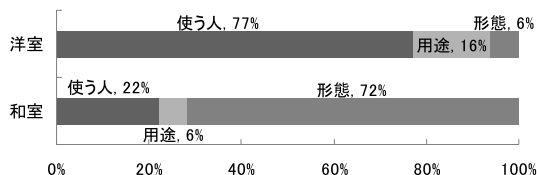


図4 洋室と和室の部屋の呼び方

5. 個室空間の使われ方

図面に記述された生活行為から、具体的に各部屋の使われ方を分析する。専有者と部屋と生活行為の関係の一覧を表4に、個室の専有者の行為の種類一覧を表5に示す。

表5 個室の専有者の行為

	私	父	母	父・母	兄	姉	弟	妹	祖父	祖母	祖父・母	合計
寝起き	75	4	6	93	12	20	18	9	1	9	13	260
飲食	2	0	0	0	1	0	1	1	0	3	2	10
更衣	64	4	7	50	6	13	10	6	1	3	5	169
生理・衛生	25	0	1	12	2	7	0	0	0	1	0	48
休憩・休養	23	2	3	7	2	5	5	2	1	5	5	60
家事	59	1	5	51	7	10	2	2	0	5	1	143
勉強・仕事	84	9	1	6	3	12	16	6	0	0	2	139
余暇趣味	154	18	4	37	14	28	32	18	5	6	5	321
団欒	10	0	0	6	0	4	8	4	0	0	2	34
接客	2	0	0	2	0	0	0	0	1	0	0	5
テレビを見る	5	4	0	19	2	1	3	0	2	8	9	53
情報・通信	80	5	1	13	18	18	11	12	0	2	0	160
累計	583	47	28	296	67	118	106	60	11	42	44	1,402

表4 専有者と部屋と行為

専有者	専有者の人数	専有者の数	図面の部屋数	部屋数/専有者	部屋の形態		生活行為の種類(N)	N/部屋数	生活行為の累計			行為率(a/Σ)	Σ/N
					洋室	和室			総数(Σ)	専有者(a)	左記以外		
私	85	85	84	99%	84	0	84	100%	688	583	105	85%	8.2
父	81	81	21	26%	18	3	20	95%	68	47	21	69%	3.4
母	85	85	8	9%	6	2	7	88%	33	28	5	85%	4.7
父・母	162	81	45	56%	34	11	45	100%	318	296	22	93%	7.1
兄	19	19	18	95%	15	3	14	78%	73	67	6	92%	5.2
姉	25	25	25	100%	25	0	22	88%	136	118	18	87%	6.2
弟	21	21	20	95%	18	2	18	90%	132	106	26	80%	7.3
妹	18	11	10	91%	9	1	10	100%	70	60	10	86%	7.0
祖父	8	8	3	38%	2	1	3	100%	22	11	11	50%	7.3
祖母	16	16	11	69%	5	6	11	100%	49	42	7	86%	4.5
祖父・母	16	8	6	75%	3	3	6	100%	44	44	0	100%	7.3
全体	536	440	251	57%	219	32	240	96%	1,633	1,402	231	86%	6.8

5.1. 「私」の部屋

専有者が「私」の部屋は85世帯のうち84世帯あり、その部屋の形態は全て洋室である。「私」の部屋がない1世帯は、現在、兄が専有（専有者が兄）使用している部屋となっていた。

図面上からは姉妹と共有が9室であるが、家具の配置等から領域区分されている例が多く、自分の空間を確保されていることから専有者は「私」と推察できる。

生活行為の記述は84人の学生全員からあり、各学生が記述した生活行為の種類は、学生1人あたり1種類～18種類であった。生活行為の種類数の分布を図5に示す。

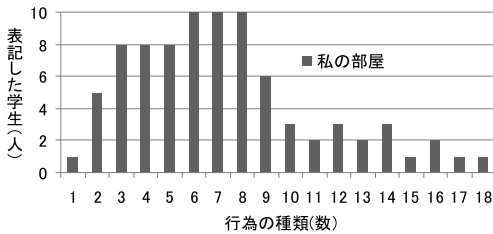


図5 「私」の部屋の生活行為の種類分布

「私」の部屋に1種類だけ行為をあげた人の行為は「勉強」であり、「私」の部屋での生活行為は累計で688種類であった。そのうち「私」の生活行為は累計で583種類であり、専有者の生活行為が占める割合（以下、「行為率」）は85%であった。「私」の部屋の「私」の生活行為を図6に示す。

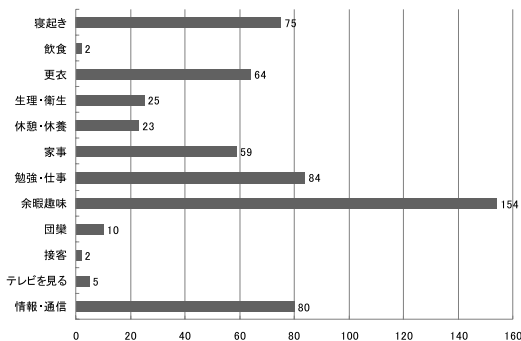


図6 「私」の部屋の私の行為

「私」の部屋は、パソコンや携帯電話を使う・勉強する部屋であるとの認識が高く、寝起きに伴い着替える等の生活行為を上回っている。また個人的余暇の趣味生活行為も音楽鑑賞・読書・楽器演奏など他種類である。さらに数は少ないがテレビを見る・飲食等の生活行為も持ち込まれている。

生活行為のうち私以外の行為は累計で105種類あり、家族のいろいろな人が私の部屋で、様々なことをしている。「私」の部屋の私以外の人の行為を表6に示す。

表6 「私」の部屋の私以外の人の行為

	行為数	父	母	兄	姉	弟	妹	祖父	祖母
寝る	13		1		2		7		
着替える	8		1	1	1		4		
化粧	3		1		1		1		
勉強	9				1		8		
掃除	13	1	10		1		1		
洗濯物を取り込む	7		5				1		1
布団を干す	2		2						
布団を敷く・たたむ	2						2		
部屋の模様替え	1		1						
雨戸を開ける	3		3						
会話	10		2		5	1	1		
明日の洋服を決める	2		1				1		
音楽鑑賞	4		1		1		2		
テレビを見る	2				1				
ゲームをする	1				1				
裁縫	1		1						
読書	5				2		3		
雑誌を読む	2				1		1		
カラオケの練習	1						1		
電話する	1				1				
パソコンを使う	3		1	1			1		
携帯電話をいじる	5		2				1		
携帯でメールする	2				1		1		
くつろぐ	4			1	1		2		
起こしに来る	1		1						
入ってくる	2					1			
物を届けに来る	2		2						
を取りに来る	2				2				
遊ぶ	4		1		1	2			
合計	115	1	36	2	23	4	38	0	1

部屋を共有している妹姉は寝る・着替える・勉強が多くある。母は洗濯物を取り込む・布団を干すなど家事サービスのほかに、洋服や化粧品や会話を通しての関わり合いが見受けられる。

姉も、妹や母の生活行為が多く見られるものの、異性の兄弟、また父・祖父母の生活行為があげられていないことから、部屋に来ることが減多にないものと推察される。あったとしてもこの記録をした「私」から、その生活行為を認識されていないものと推察される。

5.2. 父母の部屋

父の部屋 父と同居をしている世帯は81世帯であり、父の部屋を「お父さんの部屋」、「パパの部屋」

等と記述されている部屋が21世帯（26％）に存在する。部屋の形態は洋室18室、和室3室である。生活行為の記述は20人の学生からあった。父の生活行為だけを記述しているのは8人である。1つだけ父の部屋の生活行為の種類を記述した学生は5人であり、「仕事」と記述した学生が3人、「寝る」「物を取りに来る」が各1人である。生活行為の累計は68種類である。そのうち父の生活行為は47種類であり、父の行為率は69％である。

専有者である父の行為の種類は、寝起きよりも仕事、趣味、テレビや情報通信が多く、趣味の内訳は映像・音楽や読み書きが大半であった。父以外の生活行為では、母が掃除・洗濯物をしまう・寝る・物を届けに来る等、「私」や兄・姉が楽器演奏・勉強・プリンターを使う・コピー機を使う等、家族全員がパソコンを使う・本の出し入れ等がある。

部屋名は父の部屋でも、母との兼用や、子どもたちや家族全員にとってのワークステーション的機能を併せ持つ実態が浮かび上がる。父の優位性が低い理由は、父の在宅時間の短さとも関係する可能性もあるが、今回の調査からは明らかにできなかった。

母の部屋 母親は85世帯全てで同居し、「お母さんの部屋」、「ママの部屋」等と記述される部屋が8世帯（9％）に存在する。部屋の形態は洋室6室、和室2室である。生活行為の記述は7人の学生からあり、母の生活行為だけを記述しているのは4人で、生活行為の種類は33である。そのうち母の生活行為は28種類であり、母の行為率は85％である。

母の行為の種類は、更衣、休養、家事、趣味などである。母以外の生活行為には、「私」が服の出し入れ、父が着替える等がある。

父母の部屋 父母共に同居は81世帯であり、「お父さんとお母さんの部屋」、「両親の寝室」等と記述されている部屋が45世帯（56％）に存在する。部屋の形態は洋室34室、和室11室である。生活行為の記述は45人の学生からあり、父母の生活行為だけをあげているのは30人であった。父母の部屋に1つだけ生活行為をあげた学生は5人で、その生活行為は全て「寝る」である。生活行為は累計で318種類でありそのうち父母の生活行為は296種類であり、父母の行為率は93％である。

父母の行為の種類は、寝起きが多く、更衣、家事、趣味、テレビ、情報・通信、更に化粧などの生理・衛生がある。父母以外の生活行為では、「私」が会

話・髪を乾かす・スキンケア・洗濯物を取り込む・たたむ・観葉植物の水やり等であり、兄姉妹が会話・マッサージ機を使う・パソコンを使う・楽器演奏・アイロンをかける等である。父母の部屋は、寝室として独立性が高いが、室内にあるものを介して子どもたちと関わり合いがあることがわかる。

5.3. 兄弟姉妹の部屋

兄の部屋 兄は18世帯で同居しており、そのうち兄が2人いる世帯が1世帯あるため兄の総数は19人となる。「おにいちゃんの部屋」、「〇〇（名前）の部屋」等と記述されている部屋は18室確認できた。部屋名から兄の部屋とわかる部屋を専有していない兄は1名である。兄の部屋の形態は洋室15室、和室3室である。その他「以前の兄の部屋」と記述され兄の家具が確認できる洋室が2室あった。生活行為の記述は14人の学生からあり、兄の生活行為だけをあげているのは11人である。兄の部屋に1つだけ生活行為をあげた学生は3人で、その生活行為は全員「寝る」であった。生活行為は累計で73種類であり、そのうち兄の生活行為は67種類存在し、兄の行為率は92％であった。

兄の行為の種類は寝起きが多いが、それ以上に趣味や情報・通信が多い。これらの行為は複数存在する。勉強が他の兄弟姉妹に比較して少ない。家事行為もあり、弟妹に比較して自室の掃除をする人が多い。兄以外の人の行為では、母が掃除、「私」がパソコンを使う等がある。兄弟姉妹の中で、兄が一番生活行為の種類も少なく、観察者の「私」にとって兄の部屋の生活行為は、認識度合いが低い。

姉の部屋 姉は25世帯で同居しており、「おねえちゃんの部屋」、「〇〇（名前）の部屋」等と記述されている部屋が25世帯全てに存在する。

姉の部屋の形態は全て洋室である。生活行為の記述は22人の学生からあり、姉の生活行為だけをあげているのは11人である。姉の部屋に1つだけ生活行為をあげた人は1人おり、その生活行為は姉の生活行為ではなく「私が起こしに来る」である。姉の生活行為を1つだけあげた人の生活行為は「寝る」であった。生活行為は累計では136種類で、そのうち姉の生活行為は118種類存在し、行為率は87％である。

姉の行為の種類は、寝起き、更衣、勉強、趣味、情報・通信が多く、兄弟妹に比較して、化粧などの

生理・衛生が多いのが特徴的である。姉以外の人の生活行為では、母が掃除、洗濯物を取り込む等、父が起こしに来る、「私」が会話、物を取りに来る、届けに来る、ゲームする等である。姉の部屋の生活行為の記述を行った学生数、生活行為の種類は兄のそれより多く、姉の生活行為についての私の認識度は兄より高い。

弟の部屋 弟は20世帯で同居しており、そのうち弟が2人いる世帯が1世帯あるため弟の総数は21人となる。「弟の部屋」「〇〇（名前）の部屋」等と記述されている部屋が20室確認できた。部屋名から弟の部屋とわかる部屋を持たない弟は1人である。弟の部屋の形態は洋室18室、和室2室である。生活行為の記述は18人の学生からあり、弟の行為だけをあげているのは8人であった。弟の部屋に最少の3個だけ行為をあげた人に共通の行為は「寝る」「勉強」であった。生活行為は累計で132種類であり、そのうち弟の生活行為は106種類存在し、行為率は80%である。

弟の行為の種類は、寝起き、更衣、勉強、趣味、情報・通信が多い。兄弟姉妹に比較して家事が少なく、勉強が多い、妹と同様に団欒行為がある等の特色がある。趣味は兄弟姉妹のどの個室でも多いが、その内訳は父の部屋と同様、音楽鑑賞と読書に代表される、映像・音楽や読み書きが大半である傾向も似ていた。運動に関する趣味が弟に多いのが唯一の特徴である。

弟以外の人の行為数は、兄弟姉妹に比較して多く、母が掃除、起こしに来る、洗濯物をしまう、会話等、父が布団を干す、私がマンガを読む、テレビを見る、勉強、兄が服の出し入れ、姉が遊ぶ等、関わる人も多い。兄弟姉妹の中では最も専有者の行為率が低く、他の家族から、世話を焼かれたり干渉されたりしている様子がわかる。

妹の部屋 妹は18世帯で同居しており、「妹の部屋」「〇〇（名前）の部屋」等と記述されている部屋が10室確認できた。私と部屋を共有している7人を加えると、17/18人は自室を持ち、妹の部屋とわかる部屋を持たない人は1人である。ここでは私と共有しない10室の妹の個室を扱う。妹の部屋の形態は洋室9室、和室1室である。生活行為の記述は10人全員の学生からあり、妹の行為だけをあげているのは5人である。妹の部屋に最少の2つだけ行為をあげた人の行為は「寝る」「着替える」であ

った。生活行為は累計で70種類であり、そのうち妹の生活行為は60種類存在し、妹の行為率は86%である。

妹の行為の種類は、寝起き、更衣、勉強、趣味、情報・通信が多く、兄弟姉と似た傾向だが、家事が少なく団欒があるのは弟と同様である。妹以外の人の行為では、母が掃除、私が会話、勉強、読書等である。私と共有の部屋を除いているため、それらを含んでいる私の部屋の行為率より高くなっている。

以上、私・兄・姉・弟・妹の部屋の専有者の一人当たりの生活行為（専有者の行為数/行為表記人数）を図7に示す。

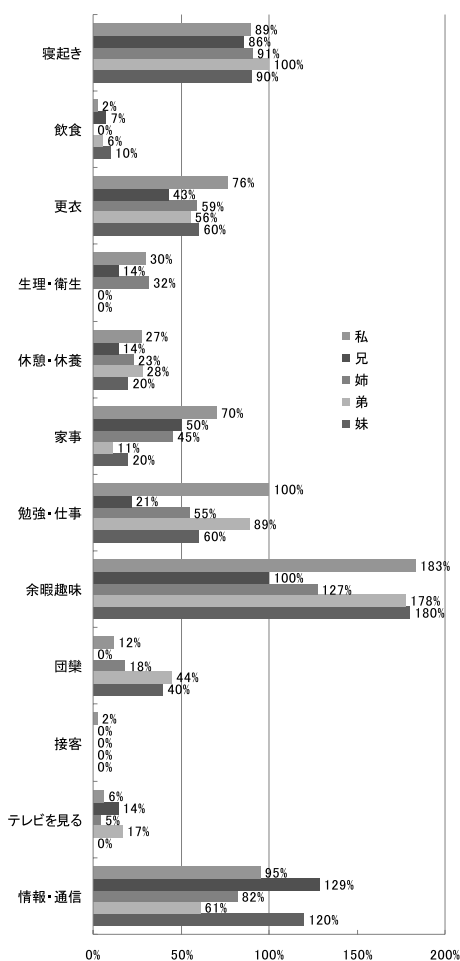


図7 子ども世代の個室の専有者の生活行為

5.4. 祖父母の部屋

祖父の部屋 祖父と同居している世帯は8世帯であり、おじいちゃんの部屋等と記述されている部屋は3世帯に存在する。部屋の形態は洋室2室、和室1室である。生活行為の記述は3人の学生からあり、祖父の行為だけをあげているのは1人であった。生活行為は累計で22種類であり、そのうち祖父の行為は11種類存在し、祖父の優位性は50%である。

祖父の行為の種類は寝起きより趣味が多い。祖父以外の人の行為では、母が新聞を片付ける、食料を保存する、掃除等、祖母が着替える、テレビを見る等、父が服の出し入れ等であり、他の家族の収納場所も兼ねられている部屋の特徴が伺える。部屋名が個室の中では、最も専有者の独立性が低い。

祖母の部屋 祖母と同居している世帯は16世帯であり、おばあちゃんの部屋等と記述される部屋が11世帯に存在する。部屋の形態は洋室5室、和室6室である。生活行為の記述は11人の学生全員からあり、祖母の行為だけをあげているのは6人で、生活行為は累計で49種類である。祖母の行為は42種類存在し、祖母の行為率は86%である。祖母の行為の種類は、寝起き、趣味の他、飲食、休憩、家事、テレビを見る等があるのが他の部屋に比較して特徴的である。祖母以外の人の行為では、私がテレビを見る、ベットと遊ぶ等、母が掃除、全員が物を取りに来る等であった。祖父の部屋と同様、家族の収納場所も兼ねられている様子があるが、祖母の部屋の行為率は祖父の部屋に比較して高い。

祖父母の部屋 祖父母共に同居は8世帯であり、おじいちゃんとおばあちゃんの部屋等と記述される部屋は6世帯（75%）に存在する。部屋の形態は洋室3室、和室3室である。生活行為の記述は6人全員の学生からあり、全員が祖父母の行為だけをあげている。祖父母の部屋に最少の2つだけ行為をあげた人の行為は「寝る」「テレビを見る」であった。生活行為は累計で44種類である。そのうち祖父母の行為は44種類であり、祖父母の行為率は100%である。

祖父母の行為の種類は、祖母の部屋と似た傾向である。趣味の内訳は裁縫などの創作、植物やベットの世話等があるのが、他の世代と比較して特徴的である。祖父母の部屋は、祖父の部屋や祖母の部屋に比較して、寝だけの部屋でなく祖父母のみの共有空間としての独立性が高いことがわかる。

父母の部屋と祖父母の部屋の、専有者一人当たりの生活行為（専有者の行為数/行為表記人数）を図8に示す。世代の異なる夫婦の部屋の特徴がみられる。

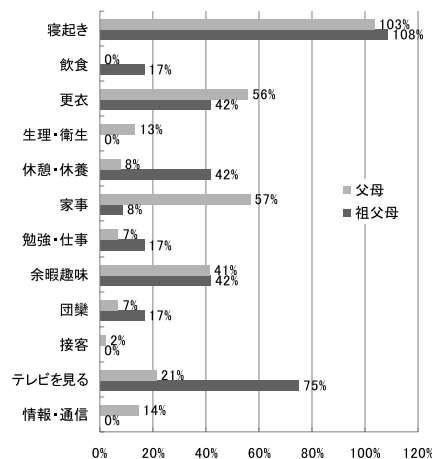


図8 父母の部屋と祖父母の部屋の専有者の生活行為

5.5. その他の部屋

図面に画かれた部屋名や家具からは、誰かの個室であることが確認できない部屋を「その他の部屋」と位置づけ、部屋の形態（洋室か和室）により、「その他の洋室」と、「その他の和室」に分けて、これらの部屋がどのように使われているのかを分析した。

その他の洋室 その他の洋室は33世帯に存在し、総数64室である。行為の記述は61/64室からあり、生活行為は累計で277種類である。1つだけ行為をあげた人は22人いて、そのうち多い行為は「服の出し入れ」「物を取りに来る」で、納戸やクローゼットの用途の部屋が多いことが推察される。行為が2人以内の人のみで完結している部屋は22室あり、内訳は母8室、父7室、父と母6室、妹1室である。さらにこのうち「寝る」の行為が含まれているのは、父1室、父と母5室で、この6室は、父の個室や父母の個室としての行為率は100%である。

その他の和室 その他の和室は45世帯に存在し、総数65室である。行為の記述は58/65室からあり、行為累計は274種類である。1つだけ行為をあげた人は7人いて、そのうち多い行為は「昼寝」「客の応対」で、畳の部屋ならではの使い方があることが

推察される。行為が2人以内の人のみで完結している部屋は21室あり、内訳は父と母15室、母3室、父2室、祖母1室である。さらにそのうち「寝る」の行為が含まれているのは、母2室、父と母6室で、この8室は、父の個室や父母の個室としての行為率は100%である。

その他の部屋の洋室と和室の生活行為の内容を図9に示す。

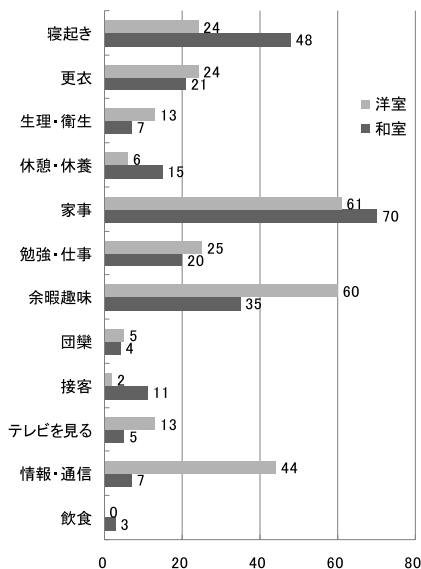


図9 その他の部屋の生活行為

その他の部屋の行為は、家事が最も多く、洋室では服や物の出し入れ等収納に関わる家事、和室では洗濯物をたたむやアイロンかけ等であった。余暇・趣味や勉強・仕事も多く、特に洋室では情報・通信も多く、家族共有の趣味室や書斎等の機能を持つ部屋が多いことがわかる。一方で寝起きの行為も、特に和室で多く、専有者のいる個室も存在する。

行為をする人では、洋室では父(33%)、和室では母(41%)の行為数が最も多い。洋室も和室も、父、母、私、祖母と続き、割合は少ないが他の家族も使っている様子がわかった。

6. 家族空間の使われ方

家族空間のLDKに当たる部屋はどの世帯にも存在し、その空間の形は図10に示すとおりである。

このうちDKの形の3室は、DKの続きに和室が

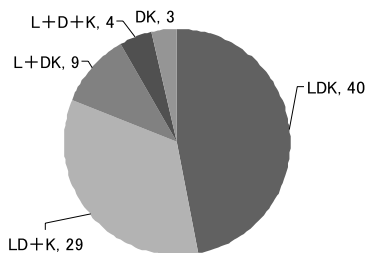


図10 LDKの形

あり、家族空間としての行為が読み取れる。他の82室の居間は全て洋室である。ここではこれらの85室を「リビング」として分析を行う。行為の記述は85人全員からあり、各々の生活行為は1種類から22種類に及び、生活行為累計は1,175種類である。リビングに1つだけ行為をあげた人は「くつろぐ-全員」であった。リビングでの生活行為の種類と行為を行う人の一覧を表7に示す。

表7 リビングでの行為と人一覧

	父	母	私	兄	姉	弟	妹	祖父	祖母	全員	生活行為の累計
寝起き	4	4	7	1	2	0	0	0	1	1	20
飲食	22	30	30	3	3	5	5	1	1	35	135
更衣	6	6	8	0	0	3	2	0	0	2	27
生理・衛生	4	14	13	0	3	2	0	0	0	6	42
休憩・休養	27	18	20	3	1	6	2	0	1	19	97
家事	11	69	27	1	1	2	1	0	3	4	119
勉強・仕事	7	11	16	0	3	4	4	0	0	2	47
余暇趣味	運動	5	11	13	0	3	3	1	0	2	38
	映像音楽	13	21	22	2	6	2	7	0	12	85
	創作	1	12	5	0	1	0	1	0	1	21
	読み書き	32	40	27	2	5	4	2	1	3	122
	その他趣味	5	10	8	1	1	2	0	1	2	32
団楽	20	19	22	7	4	4	5	0	1	34	116
接客	1	2	0	0	0	0	0	0	1	0	4
テレビを見る	24	25	23	4	4	6	5	0	1	38	130
情報・通信	26	40	30	1	9	6	11	0	2	15	140
合計	208	332	271	25	46	49	48	2	18	176	1,175

リビングでは多くの家族の行為があるが、家族構成員の中では母の行為数が圧倒的に多く、祖父が少ない。兄弟姉妹では兄が少ないことがこの表から読み取ることができる。

また、リビングでは一つの行為に複数の人が記述される例が個室に比較して多い。

例：食事をする(父・母・私・兄) テレビを見る(全員)

但しこれらの人たちが同じ行為を同時期にしているかどうか(全員が一緒にテレビを見るのか)は、今回の記述からは明確でない。リビングで家族全員

が行うと記述された行為数は176あげられ、テレビを見る38, 飲食35, 団欒34, 余暇趣味20, 休憩・休息19の順となっている。

表7の中のリビングでの生活行為累計（すべての人の生活行為）を図11に示す。

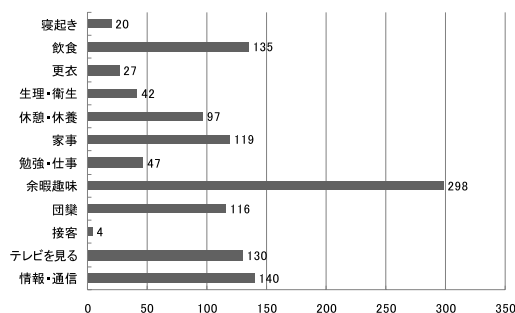


図11 リビングの生活行為

リビングでは飲食や団欒などの行為のほかに、父、母、私、以下家族の、余暇・趣味や勉強、更衣、生理・衛生に関わる個人的行為や家事などの行為がたくさんみられる。特に余暇・趣味は多種多様で、家族空間においても、各々が自分の好きなことを行う場であることがわかる。かつて団欒の中心的存在とされたテレビを見る行為が、パソコンや携帯電話を介しての情報・通信の行為数を下回っていることが象徴的である。

また、接客行為は住まい全体を通して極わずかにしか存在せず、住まい自体は家族の中に閉じられている様子が伺えた。

7. まとめ

学生から観た家族の生活行為の記述を通して、様々な住まいの中で多様な部屋が構成され、生き生きとした人と住空間と行為の関係性を読み取ることができた。

対象とした住まいでは、1人1室以上の部屋数を持つ世帯が多く、部屋名から専有者が特定できる個室は、特に洋室が多い。部屋名からは専有者を特定できない部屋でも、その部屋での行為を分析すると、実態は専有者が存在する部屋もある。しかし一方で、

個室内の行為にはその部屋の専有者以外の家族の行為も多種存在し、他の家族の関わりを許容している様子も確認することができた。

リビングなどの家族空間では、飲食や団欒などの行為のほかに、趣味や勉強、更衣、生理・衛生に関わる個人的行為や家事などの行為もみられる。住まいの中の人の行為は、nLDKの形態内に留まらず、各部屋の機能を超えて多種で広範囲であることがわかった。またその行為の種類や場所の量の多寡は、家族構成員によって差があることが明らかになった。

さらに、住生活を自らの住まいの空間との関連性から意識化し、認識を深めるという学習過程は、親元を巣立つ前の学生たちの住教育としても有意義であったと思われる。

8. 今後の課題

本稿に用いた基礎データは、学生たちの認識からの記述を元にしたため、実際の家や人の行為との差異については考慮できていない。また記述方法の統一性も十分ではないために、分析に当たっては、前提条件の整理に多くの紙面を要している。分析結果の精度を高めていくためには、研究の焦点を明確にし、他の年齢層や異性、生活時間軸との関連性を捉えることが今後の課題となる。

参考文献

- 1) 大野 晋, 浜西正人: 角川類語新辞典, 角川書店, 東京 (1981)
- 2) 藤原智美: 家族を「する」家, 講談社, 東京 (2000)
- 3) 鈴木成文, 上野千鶴子, 山本理顕: 「51C」家族を容れるハコの戦後と現在, 平凡社, 東京 (2004)
- 4) 伊藤香織, 鈴木佐代, 沖田富美子: その2 調査対象住戸の概要と生活行為の行われ方 ライフサイクル後半期における家族の特徴と住まい方に関する研究, 日本建築学会大会学術講演梗概集 (北陸), 509-510 (2002)